

令和 7 年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和 8 年 3 月 9 日

札幌市立 琴似中学校

1 今年度の重点目標

(1)学ぶ力を育む (2)豊かな心を育む (3)健やかな体を育む (4)広い視点を育む
(5)信頼される学校をつくる

2 本年度の経営方針

(1)教職員全員参画の学校経営 (2)創意工夫ある教育課程の編成・実施 (3)教育のプロ集団としての不断の研究と修養
(4)保護者・地域・小学校と連携・協働した学校づくり (5)働き方改革の推進

3 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	重点項目	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
			達成状況	現状と改善方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
目指す子ども像	自分を大切に し、他者を大切 にできる子ども の育成	自己表現 自己肯定感 感謝の心 他者とのかわり	A	本校の学校教育目標は「知・心・体の調和のとれた、豊かな人間性や生きる力のある生徒の育成」であり、今年度の全ての教育活動を貫く重点は「子どもの声を聴く」、子ども一人一人が「自分が大切にされている」と実感できる学校づくりである。本校教職員はあらゆる教育活動においてこれらを意識することに努めた。 その一方で、札幌市全体の共通指標「学習などについてのアンケート」では、自分が必要とされていると感じる生徒が他の項目と比較すると少ない傾向が見られる（約77%）が、人の役に立つ人間になりたいと思う生徒は95%を超えていた。 今後も琴中プレゼンテーションや体育委員会が企画する体育大会、小学生見学会におけるプレゼンテーションの作成や交流等、個々の力を発揮できるような活動を通して生徒が他者から信頼され、成果が認められる体験を積み重ね、更なる居場所づくりを進めていく。	A	A
学校関係者評価委員会 による意見	今年度は、「学ぶ力」「豊かな心」「健やかな体」「広い視点」を育み、「信頼される学校をつくる」という5つの重点目標を掲げているが、概ね順調に推移しており、各項目の評価はいずれもAであり適切であると考えられる。生徒については、メタ認知能力が高く、自分自身を見つめることができる生徒が多いため、謙遜する傾向もあり、アンケート項目の「自分が必要とされていると感じる」の回答が比較的少なくなっているものと考えられる。また、アンケート結果を見ると、学年が進むにつれて肯定的な回答が増えており、生徒の成長や先生方の教育活動の成果が表れていることがうかがえる。					
人間尊重の教育	個別の人権課題 に関する学習	互いの個性・多様性の認め合い 心豊かにしなやかに生き ようとする態度の育成	A	「子どもの声を聴く」という全ての教育を貫く重点に掲げ、学校づくりに努めてきたが、教職員自らの人間尊重の意識向上を目指し、特別支援教育巡回員による研修を行った。また、「さっぽろっ子サミット」に向けての校長と生徒会役員との対話や、学校運営協議会において子どもの思いを聞く場を設定するなど、子どもの思いや願いを把握することができた。 今後も、あらゆる教育活動を通じてより良い人間関係づくり、環境づくりを推進していく。	A	A
「学ぶ力」の育成	学ぶ意欲	指導と評価	A	授業において、ICTの効果的な活用や課題探求的な学習の充実を意識した結果、アンケート項目の「疑問や課題を解決するために自分で方法を考えたり、わからないことをわかるまで努力したりした」という内容について、学年が上がることに増加傾向が見られた。 今後も課題を自分事としてとらえられるような導入時の意識づけの工夫等を行い、生徒自身の問題解決能力を高められるよう授業改善に努めていく。	A	A
「豊かな心」の育成	命を大切に する指導	命の尊さ いじめなどの問題	A	日常生活や行事、道徳教育等を通じて、命の大切さを考える機会を設けた。また、心と体の健康アプリ「シャボテンログ」の活用や、SC・SSWとの連携を通じて、子どもの困り感への迅速で組織的な対応を心がけた。 今後も組織的に子どもの些細な変化に気付けるよう努めていく。	A	A
「健やかな体」の育成	「健やかな体」 育成プログラムの 実施	体力を高めるための取組 の充実	A	体育的行事や昼休みの体育館・グラウンドの利用、体育委員会企画の「クラス対抗レクリエーション」等、運動できる場面を工夫してきた。 今後も生徒が主体となり、持続可能な内容で活動の幅を広げていく。	A	A

いじめ対策	未然予防と迅速な対応	被害生徒と家庭のケア 加害生徒の成長につなげるための支援	A	日常的な観察により小さな変化を見逃さず、早期発見に努め、兆候を把握した際は組織的に共有し、迅速かつ適切に対応した。未然の予防としては「スマイル琴中宣言」や「SNS講演会」等の取組を行った。いじめが発生した場合は、行為の背景を丁寧に把握し、保護者と連携しながら自己の行動を振り返らせる支援を行った。 今後もこれらの取組を継続し、いじめを生まない学校の雰囲気づくりに努めていく。	A	A
一貫性・連続性のある教育(小中一貫した教育)	系統性のある指導	教職員の連携・協働 一貫性・連続性のある教育	A	6月の札教研では教員同士の情報交流や分野別の意見交流を通して、学習指導や生徒支援等の理解を深めた。また、2月の小学6年生を迎える取組では児童・生徒間の交流を通してお互いの理解を深め、中学進学時に感じるギャップの緩和につなげた。 今後も無理のない形で取組を継続していく。	A	A
学校関係者評価委員会 による意見		常に指導と評価の一体化を念頭に置いた取組が求められる。また、研修会等において各教科の実践内容を交流し、生徒がどの程度の力を身に付けたのかを確かめるとともに、教師同士で評価し合う機会を設けることが望まれる。前後期制となったことで単元テストが増え、その対応に負担を感じているという声も聞かれるため、必要に応じて改善を図っていくことが大切である。				

学校独自に 設定する分野	教育課程の編成の工夫	A	今年度はこれまでの取組を継続し、1学年の総合的な学習の時間において、地域の防災マップ作りを行ったが、次年度以降は（2年後の実施を目指して）市内の施設等を訪問する探究活動を生徒が自ら計画するなど、地域と協働しながら主体的に学ぶ教育課程の工夫を図っていく。また、おやじの会の講師による授業や冬季イベントの雪に関する取組等、本校独自の活動を継続していく。	A	A	
	教科等の枠組みを超えた教育	A	総合的な学習の取組の一環として、琴中プレゼンテーションを実施し、課題探究的な学習の充実を図った。今後は各教科で培った力を活用し、学校で学んでいることが外の世界とつながっていることを実感できるように、学びの一層の深化を目指していく。	A	A	
学校関係者評価委員会 による意見		全ての教員が、総合的な学習の時間や特別活動の目的を十分に理解した上で、計画的に教育活動を進めていくことが望まれる。また、プレゼンテーションについては、単なる発表にとどまるものではなく、課題設定、情報収集、分析・整理、表現といった探究の過程を経た学習成果として位置付けることが大切である。				